
だから彼女はついてくる！

今宮いたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だから彼女はついてくる！

【Nコード】

N0603X

【作者名】

今宮いたる

【あらすじ】

神村イツキは、記憶喪失の少女『雪城鈴』に付きまとわれている。現代の常識が殆ど吹っ飛んでしまっている彼女と、それに振り回される彼の日常を描く。たぶんこれはハーレムの方針になるでしょうね。

これが二人の日常

「あっ」

夕方、コンビニの店内に不吉な音が響く。

開封された、いや開封されてしまった袋からは枯葉のようなものが何枚も舞い落ちている。

ポテトチップスだ。

「うわああ！ 何やってんだよお！」

ほんの一瞬、神村イツキが彼女から目を離した瞬間の惨事。

彼は狼狽してしまふ。当然だ。

「開いちゃった……」

自分でも良くないことをしたという自覚があるのだろうか、雪城鈴は自らの手で開封してしまったソレを両手に持ち、申し訳なさそうにイツキに視線を送る。

「ああ、もう！ 貸して！」

急いで走り寄り、少し乱暴気味に彼女の両手からポテトチップスの袋を引っぺがす。

「何にも触れずに待ってて」と言うと、彼はレジの方へ駆けてゆく。レジにいるアルバイトであろう店員に頭を下げて平謝りをする彼の姿を見ながら、彼女は頭を掻く。いけないことをしたという自覚はあるのだ。ただ、その判断基準は彼女にとってはとても曖昧なもの。

どれが正しくてどれが正しくないのか。

何が普通であって何が普通ではないのか。

彼女にとって全ては未知の世界。

「ごめんね? イツキ」

帰り道、イツキの顔を覗き込む鈴。真珠のように黒く長い髪の毛と大きな目が特徴的だ。

「……ああ、いいよ」

少し疲れた様子で応える。

「ああいう所では開けちゃダメなんだね。次からは気をつける」
自分の胸のあたりで両手を結びながら、心に刻むように唱える。

「……そもそも、なんでポテチの袋なんか持ってたんだ?」

「何かなって思ってた」

「それで、確かめてたら開いた、と」

「そう」

「好奇心旺盛か、お前は」

「だ、だからあ! もうしないよ! 触らないもん!」

反省（弁解?）する彼女の姿はもう何度見ただろうか。

「いや、注意するの忘れてたし、俺も悪かった」

「はあ。この前行ったお店では、開けるどころか食べることだってできたのに、不思議だね……。判断が難しくって参っちゃうよ」

「あれは試食って言って、食べ物宣伝だ」

「ふーん……。じゃあもつといっぱい食べとけば良かった」

「やめろよなあ、みつともない」

イツキは年頃の女の子がスーパーの試食コーナーにがつついている姿を想像しながら述べる。

「でも、良かった!」

「? 何が?」

鈴の顔が少しだけほころぶ。

「だって、欲しかったんでしょ? ソレ。なら丁度良かったじゃん!」

イツキの持つコンビニの手提げビニール袋を指して話す。中には先ほど開封済みのポテトチップスが入っている。

「欲しかったんじゃないよ！ 買い取らされたの！ 商品にならないから！」

「ええ！ そうなの！？」

「そうなんですよ、鈴さん」

本当に驚いた表情をしている鈴に彼も怒る気が無くなってしまう。その代わりに深い嘆息が漏れる。

家に着く頃には、彼はすっかり疲れきってしまっていた。近くのコンビニ行っただけだというのに、この疲れ様は何なののだと言いたくなる。それに対して鈴はまだまだ元気だ。いつものようにテレビの前にちょこんと座って、チャンネルをいじくり回している。

「明日だよね？」

天気予報が明日は晴れだの曇だのと言っている。その前に座っている鈴はテレビから視線を外してイツキに移行しつつ話しかける。

「学校か？ そうだな」

「イツキと同じ学校で、しかも同じクラス！ 改めて、宜しくね！」
満面の笑みだ。

彼女、雪城鈴は明日から『おそらく』高校2年生になる転校生。彼女が転校して在籍する予定のクラスは神村イツキと同じ。そして学校は明日の4月1日から始まる。

「ああ」

（宜しくって言われてもなあ……）

晩ご飯の支度をしながら彼女が話に耳を傾ける。

明日が4月1日ということは、今日は3月31日。彼と彼女が接点を持つのは明日からのはずである。

神村イツキが在校生で、雪城鈴が転校生。

そういう関係になるはずだ。

だが、彼女は2週間も前から神村イツキを見つけて付きまといっている。そう表現してしまうと鈴には不意かもしれないが、現にそれ以外にこの状態を表す言葉が見当たらないので仕方がない。

「……鈴。本当に鈴は転校生で、明日俺と同じクラスになるんだな

？
」

「そうだよ？」

「じゃあ、丁度いい。鈴、俺から離れるんじゃないぞ」

「そーんなこと言われなくてもわかってるよお」

鈴が嬉しそうにイツキに飛びついてくる。だがイツキは「しまった！」という表情をしてそれを回避して跳ね除ける。

「そういう意味じゃなくて！」

「じゃあ、どういう意味で？」

「お前、記憶ないんだろ？」

「ない。ほとんど覚えてない」

「だから。また変なこと為出かすかもしれないだろ？」

エプロン姿で人參を切りながら、居間に追い返した鈴に話す。彼は県外の出身者なので、一人暮らしだ。主に両親からの仕送りで生活している彼は、自分の生活することで精一杯の毎日を送っていた。

そこにヒョコツと現れたのがこの雪城鈴。

「しないよお」

まさかあ、と言うような表情で彼の方を見る鈴。

「いや、する。初めて会った日、ずーっと俺を尾行して家までついてきたお前なら、十分にありえる。現に今日もひとつやかしたしな」

「欲しくもない商品を買ったこと？」

「違う！ お前がポテチを店内でぶっ放したこと！」

この調子で明日から大丈夫なのだろうかと不安になる。いや不安なんてものでは到底済まない。この不安という表現は、『ヤバイ』という言葉に置き換えられる。それも、テスト前に勉強してないからヤバイ、とか、今日体育の授業があるのに体操着を忘れたからヤバイ、とか、そういう類のものではない。それはもう、電車が到着する瞬間にホームに転落したからヤバイ、とか、ハイキングしていたら滑落した上に目の前に5匹もクマがいるからヤバイ、とか、そ

んな感じのヤバさだ。彼が伝えたいのは、とにかく安穩としていられる状況ではないということ。

「だからあつ、ソレは反省してるよお……」
肩をすくめる鈴。

鈴にはどこか保護欲を煽る雰囲気がある。小さな背丈に、幼い女の子を思わせる顔立ち。肩幅も狭い。大きな人形を抱えさせたら、ほとんど隠れてしまいそうなくらいだ。その姿を見るたびに彼は「うっ……」口をつぐんでしまう。これ以上彼女を責めることにどこか罪悪感を覚えてしまうのだ。

そして記憶喪失故にこの現代社会における断片的な知識しか持ち合わせていない。ましてや常識なんてあったものでもない。

一般常識がないことも、記憶喪失であることも、この社会で生きて行く上では致命的なことだ。だがイツキにはそれをも上回る最大の関心ごと兼疑問点があった。

それが――「もう一度聞けど――」

「――なんでお前は俺から離れないんだ？」

大きく息を吸った後に投げかけるこの質問。もう何度しただろうか。

だが、鈴はその間に決まって

「よくわかんない。でも、イツキから離れちゃいけないの」

と答えるだけ。もちろん今回も例外ではなくお決まりのコレで返される。まるでテニスの壁打ち練習かのようにだ。彼には鈴の真意が掴めなかった。当の本人もその言葉の意味を深く察していないようであるから、答えのいとぐちさえ見いだせない。

今日の晩御飯は焼き魚と野菜炒めに白米。それらを盆に乗せて鈴の居る居間に運ぶ。イツキは作りたての料理を居間のちゃぶ台にひとつずつ丁寧置く。

「わあ」と目を輝かせる鈴。さっきまで夢中だったテレビはそっちのけだ。

「ねえ、もう食べてもいい？」

「ちょっと待ちなさい。手で食う気かお前は」

「手で食べてるところもあるんだよ？」

「確かにあるケドな、それは外国の話だ。ていうか、なんでそんなこと知ってるんだ？」

「テレビで言ってた」

イツキは会話を続けながら二人分の箸とコップを持ってくる。続けて冷蔵庫からお茶の入ったピッチャーをちゃぶ台まで運び、やっとうご飯の時間になった。

明日はとうとう始業式。

木炭と自己紹介と自動ドア

雀のさえずりが聞こえる。

日差しが嫌というほど彼を照りつける。

「朝だよー!!」

鈴が思い切りカーテンをオープンしたのだ。

相変わらず朝っぱらから元気なヤツだなあ、と彼は眠い目をこすりながら肌蹴た布団を再びかぶる。

「あー!」

彼女が近付いてくる足音。

彼の周囲の世界は再び強制的に明るくなった。急いで布団を探すも鈴に後方へ吹っ飛ばされているので、偶然が味方してくれる以外に手探りでは探し当てる術がない。

「あーさー!!」

また元気な声が聞こえる。

「うるさいー……」

イツキは小さな声で反撃に出る。

「朝だよイツキ! 朝! あーさー!」

「わかった、起きる。起きるから大きな声を出すなって。近所迷惑だろお?」

眠そうな声だ。

「アーサー、アーサーって。なんかの王かお前は……」と、ふと浮かんだ下らない冗談を鈴にふっかけてみるも、目をこすっていた手をどけると彼女は彼の前にはもういなかった。

「何ー? 呼んだー?」

台所の方から鈴の声。

「いや、何にも……」

少し気恥ずかしそうに制服へと着替えを始めた。朝から騒ぎ立っていた鈴はもう既に着替え終わっている。彼女に遅れること数分、

制服に着替え終わったイツキは眠たそうなふらふらとした足取りで台所へと向かう。

「はい、ご飯！」

急に彼の目の前に、鈴が『ご飯』と称するものがズイと差し出される。

「……木炭？」

「違うよ、パンだよ」

「パンかよ！ 炭化してる！」

「うーん、どうも上手く焼けなかったみたいでねー」

『いやー、参った』とでも言いたそうな表情。台所のテーブルの上はパン粉だらけ。袋から取り出す作業に手間取ったと見える。

「でもさ、こういうのって『見た目じゃない』ってよく言うんでしょ？」

「誰が言ってる——」

「テレビ」

彼女の知識は大体がテレビかイツキ。彼が与えていない知識は全てテレビであるから、イツキが『誰から聞いた』と鈴に質問してもその答えはテレビに決まっているのだ。彼もそのことは知っているのだが、つつい反射的に聞いてしまう。

「だからさ、見た目じゃないんだって！ 食べもせずによく言うよー」

「いやいや、今回ばかりは見た目が重要だろ！ 見るからに食い物じゃない色してるし！」

「えー、せっかく作ったのにい」

「『作った』って、焼いただけだろ？」

目の前に差し出した皿をテーブルに置きながら、鈴は少し残念そうな表情をする。

「まさか、お前もその消し炭を食ったのか？」

「私は上手く焼けた方を食べた」

「おい！ 失敗作の自覚あるんじゃないか！ 食わそうとするなよ」

な、そんなモン……」

イツキは文句を垂らしながら新しいパンを袋の中から取り出し、オーブントースターに放り込む。

「パンは1分くらいで十分。覚えといて」

と言いながらつまみをひねる。

「うん、私もさっきそれを知った。10分焼いたら真っ黒になったんだ」

「そ、そうか……」

10分も焼かれるなんて、何と不運なパンだろうか。冷凍されているパンでも10分間も焼いたらコレと同じ様な暗黒の姿を披露するだろう。しかもよくよく改めて見てみると木炭と言うより、完全に炭だ。このまま『炭』としてパッケージされて商品棚に陳列されていても気付かないほどに真っ黒。それにチラと視線を送りつつさっさと食事を済ませたイツキは、もう既に玄関で待っていた鈴と一緒に学校へ出かけた。ガラス越しではない朝の日差しがまた一段と眩しい。



——何度車に轢かれそうになっただろうか。

教室に到着して自分の席に座る彼は、始業式もまだ始まっていないのにもうぐったりだ。

（道路で鈴が走りまわるから……）

鈴は車の危険性を把握している。『車には注意しないといけない』ということもイツキから幾度と無く諭されてきたので、少なくともその分別はあるはずだ。だが、圧倒的な経験不足。社会的な経験がまったくもって足りていない。彼女が記憶を無くす前はあっただろう『常識』が、今は欠片ほどこしか残っていない。毎日が学習だ。例

えば車が曲がり角や死角から飛び出してくるかもしれないとか、急に止まることができないとか、彼女も頭では分かっているはずだ。見ればわかることばかりだし、理解するには容易いこと。しかしその危険性を、身を持って知っているわけではない。だからこそ彼女の無鉄砲且つ大胆な行動が、イツキには心配で心配で仕方なかった。

（あいつ、今頃一人で大丈夫だろうな……？　変なことしてないだろうな……？）

イツキの脳裏に職員室前で別れた鈴の顔がよぎる。確か満面の笑みで、別れ際にこっちに向かって手を振っていた。彼女が何か変な行動でも起こすのではないかと、イツキの内心はそれはもうハラハラものであったのだが、そんなことを微塵も察していなかったような無邪気なあの表情がまた彼の不安を倍増させる。

始業式は滞り無く執り行われた。校長先生の長ったらしい話も、よくわからない賞状の授与も、来賓の紹介も、彼らにはどうでもいい話。全く頭になんて入っていない。特に今の神村イツキには、そんな話の一片も入る余地など残されていなかった。なぜならこの始業式が終われば次は教室でのホームルーム。普段なら授業ではない、半分歓談の時間となるこの授業。生徒たちにとっては何のプレッシャーもかからない至福の時となるはずだ。それが今回は彼の最大の試練。おそらくこのホームルームの時間に――

「――じゃあ転校生の紹介の時間といこうか！」

教室が一気に沸き立つ。先生が「転校生は女子」だと告げると、より一層大きな歓声に包まれる。

「イツキ、お前ももっと喜べよ！　女子だってよ！」

「あ、ああ……」

沸き立つ男子生徒にも、力のない笑顔で返す。これからの苦労を考えると両肩に重荷を乗せられるような思いだ。

「それじゃ、雪城。入ってきて」

先生が扉の向こうに立つ転校生、雪城鈴の入室を促す。

「マジかよ……」

小さな声でイツキがつぶやいた。彼女の言っていたことが本当だったからだ。根拠もなく言い張る鈴に、完全には信じきれない気持ちがある。どこかにあった彼の思いは、また確信へと一歩駒を進める。彼がそんな思索を巡らせている間に、教室がざわざわした。教室の扉は引き戸形式の一般的なもの。その扉の磨りガラスの向こう側に影が見える。雪城鈴は確かにその向こうにいる。だが扉は開かない。

「……。……。……あれ？」

鈴は教室の扉の前でつつ立ったまま。何か不思議なものを見るかのように扉を眺めているだけ。

「？ 雪城？」

訝し気な表情をする先生と生徒達。

（何してんだよ、早く入って来いって！）

念波でも出るのではないかというほどに強いメッセージを『鈴に届け！』と祈るも、そんなことを知る由もない当の本人は脳内ハテナマークで呆然と立っているだけ。しびれを切らした先生が扉をガラッと開けると、鈴は「うわっ！」と小さく声を出して驚いた。

「何をしているんだ？ 早く入りなさい」

「あは、はい。自動ドアじゃないんですね」

鈴はどうやらコンビなどの自動ドアと勘違いしていたらしい。思えば彼女はイツキとコンビにくらいしか行動を共にしたことがない。記憶のない彼女が『引き戸形式の扉は全部自動だ』と勘違いしているのも不思議ではない……？

これはイツキには強烈な先制パンチであった。

（ぐっ……！！ 初端からこんなインパクトの強いことやりがつてえ……！！）

先生はこの鈴の返答に失笑。彼女なりの、何かの冗談だと捉えたのだろうか。

鈴は教卓の前に移動する。そして白のチョークを手に取り、黒板に大きく自分の名前を書いた。

「札幌雪祭りの『雪』にノイシュヴァンシュタイン城の『城』、鈴鹿サーキットフラワーガーデンホテルの『鈴』で『ゆきしろすず』と言います。よろしく願います」

ぽかんとする先生。

（自己紹介、斬新過ぎるだろ！　ただでさえ言動が目立つのに、これ以上注目をあびるような真似やめてくれよ……）

イツキの精神は初端から大きく削られる。

だが生徒たちの反応は上々。不思議な女の子だなと思われた程度に済んだようだ。さすが雪城鈴の美少女補正。普通ならば『変人だ』『近寄ったら色々な意味でケガするかも……』と思われるところを逆に自らのアドバンテージに変えてしまう。たとえ本人にその気が無くとも『これもこの子の魅力なんだ！』と思わせてしまう。逆の立場なら世の中の不条理を痛感するところだ。実際は彼らの第一印象のままの人間なのであるが……。だが、まさか彼女が記憶喪失者で、しかも神村イツキと一緒に住んでいるなどということは、一瞬たりとも、微塵も思いもしないだろう。もちろんこれは内緒だ。広がれば騒ぎになる。記憶喪失の人なんてこの世は広しいえどもそうそう居てたまるものではない。バレると騒ぎになるのは容易に想像できる。だからイツキも鈴に事前に口止めをしたのだ。鈴はそれに頷いてくれたものの、それだけではこの不安感は解消するものではない。



「いや、初めて知ったよ」

ホームルームも終わり帰路につくイツキと鈴。

「何が？」

「教室のドアって、勝手に開かないんだね」

彼女はイツキと出会ってからの記憶しかない。それ以前の記憶は断片的にしか残っていない。更にイツキが鈴を連れて出かけた場所といえどコンビニくらい。コンビニのドアは勝手に開く。御存知の通り自動ドアだ。鈴はそれしか見たことがない。やはり鈴の中では『扉＝勝手に開く』という図式が出来上がってしまったのだ。

「あのなあ、俺の家のドアは勝手に開くか？」

「開かない」

「それと同じ。ドアってのは普通は人が開けないと開かないんだよ。コンビニとか、そういう店とかではサービスで自動だけで普通は自動ドアじゃないんだ。それに、家のドアが自動ドアだったら防犯上宜しくないだろう？」

「それは大丈夫だよ！」

彼女のつぶらな眼差しがイツキに向けられる。

「？　なんでよ？」

「イツキは強いから！　もし悪い人が入ってきても、やっつけちゃうんだから！」

鈴は笑顔でそう言い切った。

彼にはまさに青天の霹靂だった。

人生で一度も言われたことのない言葉、『強い』。

彼は全く強くない。ケンカだってすぐに負ける。いや、負ける前に降参する。スポーツは人並み。何か突出してできるというわけでもない。

「はあ、別に強くないぞ？　おれ」

鈴の確証のない適当な妄言だと彼は判断する。

「強いよ！」

だがそれは鈴の強い語調で否定された。

「え？」

「強いんだよ、イツキは！　私、何にも覚えてないけど、イツキが強いことは間違いない！」

いつもより強く主張を続ける鈴。つつい気圧されてしまう。

「そんな根拠もなく強い強いって言われてもなあ……。どこがどう強いんだ？」

「そうだね、銃を持った強盗に素手で応戦するくらい強い」
場面を想像するまでもなく、敗退濃厚なシチュエーションが容易に想起される。

「強すぎるだろ！ 何かの達人かよ！ ていうかその『強い』の意味、違うくねえか！？」

信憑性など元々無い鈴がこのようなトンデモ例え話を披露しても説得性は皆無。

なので

「……ああ、もうわかったよ。何がどう強いのかよく分かんねえけど、鈴の期待する程度には強くなるように頑張るよ」

と、イツキは華麗に流すことにした。

このまるつきり信じていないイツキの口ぶりに、鈴は口を尖らせる。

「……信じてないでしょ」

「いやいや、信じてますよー」

明らかな棒読み、鈴はプイとそっぽを向く。

雪城鈴が突然突拍子もないことを言うのは日常茶飯事。
イツキもそろそろ慣れてくる頃だ。

ドラマ

「イツキ」

「うん？」

昼食を終えた休日の昼過ぎ。

鈴はいつもと同じく食い入るようにテレビに齧り付いており、イツキは台所で食器の後片付けをしている。

「人間ってさ、いつどんなことが起こるか分かったもんじゃないよね」

「……？ あ、ああ。そうだな」

急に畏まって話す鈴に違和感を覚える。しかし、特に何の反応も示さず台所で自分のすべき仕事をする。そもそも当の本人がその『いつどんなこと』に巻き込まれて記憶喪失になってしまっているのだから世話もない。

「……………」

それっきり、またテレビ集中モードに突入する鈴。

突然変なことを言うのは鈴のいつもの日常だ。だがそれも記憶回復と学習に繋がる。それを分かっているイツキはこれ以上介入する考えを意識的に排除する。

居間から「ぷはぁ〜」という気の抜けた声が漏れ聞こえてきた。

「ねえ、イツキ、イツキ」

「んー？」

返事は皿とスポンジを持つ手を動かしながら。

「イツキの遺産はどれくらいあるの？」

「！？」

洗っていた皿を滑って落としそうになってしまう。

「はぁ！？」

「『はぁ！？（モノマネ）』じゃなくて、あるの？ 遺産」

真似されたことに少しイラッとするも、いきなり出た『遺産』と

という言葉にたじろぐ感情が先行する。

「……」

「どうなの？」

「……………ないけど……………多分……………」

心のなかで「高校生に遺産なんてあつてたまるか!」と叫ぶ。

その返答を聞いた鈴の表情が緩む。

「ないんだ! ないんだね! 良かったあ!」

イツキは何故いきなり鈴がこんな質問をしたのか訳が分からなかった。遺産がないと分かり喜んでいるのもよく分からない。もしあつたらどうだと言うのだろうか。

「……………一体どうしたんだ? 遺産って何のことだ?」

「さっきのニュースでね、あるお金持ちの一家が遺産相続を巡って殺人事件に巻き込まれたつてのをやってたんだ」

休日の昼過ぎ、13時半なんていう微妙な時間帯にニュースなんてあつただろうかとイツキは自分の記憶に検索をかける。

「そんでね、犯人はベビーシッターの人だったんだけど、それを用務員のおばさんが壁から「いやあねえ」つて見てて、結局それが決め手になってその人は逮捕されたんだつて!」

鈴の話すニュースは、どうやらイツキがいつも見ているニュースとは一味も二味も違うようだ。不審に思ったイツキはおもむろにチャンネルを手に取り、『番組表一覧』のボタンを押す。

「ニュースなんてやってないぞ?」

一覧にはニュースなど載っていなかった。一斉に12時に始まり、頃合いのよい時刻に終わっている。

「ええ? そんなことないつて!」

「でも、どこにもないんだけど」

「よく見てよ」と、鈴はイツキからチャンネルを奪い取り、番組の時刻軸を13時半辺りに持ってくる。

「ほら、あつた。これ」

ほらと言われるイツキだが、どこにもニュースという文字は見え

ない。

「どれ？」

「これ」

『偽りの果实く呪われた遺産』（再）』

「昼ドラだよ！！」

「ヒルドラ？ ヒルドラー？」

「そう！」

「一般的な家庭で起こった事件をドキュメンタリー風に描いたニュースじゃないの？」

「違う！　なんで一般的な家庭に『呪われた○○』があるんだよ！」「でもでも！　ちゃんと天気予報もやってたよ？　上の方に小さく出てた」

「それ臨時テロップだよ！！　なんで天気予報がそんな冷遇されてんだよ！　いつももっと大きいだろう！？」

鈴のテレビの知識が変なふうに解釈されて彼に押し寄せている。

最初の頃に比べると段々と会話が成立するようになってきたのは嬉しいのだが、このような一面を見てしまうと、まだまだ鈴が世間では通用しないということは火を見るより明らかだ。

先ほどまで自分がニュースだと思っていたものをバツサリと否定されてしまった鈴もどこか反論したい様子が伺える。

「あ、そうだ！」

鈴は思い出したかのように冷蔵庫の方に駆けてゆく。

「呪われた黒いパン」

「それはお前のせいだろ！！　早く捨てなさい！！」

◇
◇
◇

イツキはふと、始業式のあの一件を思い出す。

「それとな、変にインパクトのあることするなよな」

「何が？」

「始業式ん時の自己紹介だよ。ノイ……なんたら城とか言ってただろ」

「ノイシュヴァンシュタイン城のこと？ 知らないの？ ルートヴィヒ二世が建てたドイツの城で、昔はノイホーエンシュヴァンガウ城って呼ばれてた——」

「それ。それだ」

「それがどうかしたの？」

「どうもこうも、普通はそんな自己紹介はしないんだよ。お前がその何とか城を言った時、先生の顔見たか？ 『何言ってたんだ？』みたいな表情してたぞ！」

イツキは鮮明に覚えている。

あの空気、先生の表情。

自分のことでもないのに緊張で喉がカラカラになってしまった、あの時の雰囲気。

全てを。

「……そうなんだー……。じゃあ、チェスキー・クルムロフ城の方が良かったかなあ……」

「どっちもアウトだよ！」

城の知識は何故か残っている様子の鈴。実に断片的だ。ただせっかく鈴が覚えていたこの記憶は、日常生活を営む上では本当に何の意味もなさない雑学に過ぎない。こんなことではなく、少しでも常識人に戻れるような知識を覚えておいて欲しかったとイツキは心の底から思った。

「じゃあさ、イツキは初めて皆と会った時、どんな風に自己紹介したの？」

「どんな風になって、そりゃまあ普通に名前言って、『よろしくお願ひします』って」

つまらなそうな顔をする鈴。

「それだけ？」

「それだけだよ。他に言うことあるか？」

「あるよ！ アリアリだよ！ そんなんじゃ自己紹介失格だよ、イツキ！」

イツキの目の前に迫りながら説得にかかる鈴。いつもよく分からないことを言い出す鈴だが、今回のことについては一理あるかもしれないと少し思った。クラスの中でも地味な立ち位置のイツキ。もう少しくらい垢抜けても良いのではないかと彼自身も考えていたのだ。

「そんじゃ、どうすりゃ良かったと思うよ？」

「普通過ぎるんだよ、さっきのは！ 私みたいに臨機応変にアレンジを加えつつ自己紹介したほうがいいって！」

あの奇抜な自己紹介は鈴なりの創意工夫の結果だと知って、その彼女の努力にイツキは少し感心した。

「そうだねえ」と、鈴は腕組みをして考える仕草をする。

「貧乏神の『神』に、村八分の『村』、いつ来ても誰もいないの『イツキ』で神村イー——」

「——いじめられるよおおおおおおおおおお！
絶対いじめられるってええええ！！ 何いきなり自分からネガティブキャンペーンしてんだよおおおおおおおおおおおおお
おおオオオオツツ！？」

今日も緩やかに時間が過ぎる。

出会った日のこと

神村イツキと雪城鈴が出会った日。

それは彼のありふれた日常の切れ端に登場する脇役の内のひとりに過ぎなかった少女が、一気にヒロインの座を射止めたオーディションかのようなだった。

その日、イツキは終業式を終えていつもの帰り道を歩いていた。明日からは春休み。足取りは普段よりも断然に軽い。何をするでも、何かわくわくするような計画があるわけでも、カノジョと遊ぶでもない。そもそも彼にはカノジョなる存在などいない。そんな極普通過ぎて特筆して述べるようなところなど何もないような彼でも、明日から二週間と少し自由の身でいられると思うと心がわき立つような気持ちになる。ガラにもなく「何か面白いことないかな？」なんて思ってしまう。

「……！」

イツキの思いは、意外とあっさり神が叶えてくれた。

彼は一人暮らしの自宅へと進めていた足を、思わず止めてしまった。

まるで時間が停止しているかのような錯覚に陥りそうになる。

商店街の喧騒からも離れた住宅街、彼の視線の先には見たこともない少女。

一言で、とても美しかった。

昼下がりの日光がその少女の流麗さをより一層際立てる。

一人佇む少女は不安気な表情を浮かべ、何かを探すように辺りをキョロキョロしている。

これは自然に話しかけられる絶好のチャンスではないか。

一瞬、彼はそう思った。

道に迷ったのであれば、親切心として道を教えてあげる。人としてあるべき行動。別にその相手が美少女だから、などという訳ではない！ と彼は自己弁護をする。

——だがしかし、いかんせん彼にはその一步を踏み出す勇気がなかった。

もし話しかけることが出来れば、知り合いになれるかもしれないのに！

友達になれるかもしれないのに！

上手く行けばメールアドレス、電話番号でもゲットできるかもしれないのに！

「ありがとうございます！ 今度お礼がしたいので、お暇な時間があれば、またお会いできませんか？」なんていう展開が待っているかもしれないのに！

あわよくばカノジョに——

——しかし。

しかしやはり話しかける勇気がない。あと少しでその少女の横を通過しきってしまう。実に惜しい。少しでも時の流れが緩やかになればいいのに、なんて有り得るはずもないことを思ってしまう。

一步、二歩、……。

ああ、彼は通り過ぎてしまった。

彼の青春の一ページはまた何の進展もなくめくられて——

「……イツキ？」

——聞き間違えだと思った。

イツキは彼の名前。神村イツキ。

初めて会ったその少女が彼の名を知る由もない。

「イツキ……だよね？」

しかし、その少女は間違いなく『イツキ』と言っていた。

「え……。俺……？」

振り返った彼は質問を返す。

「やっぱりイツキなんだね！」

その少女はそう言うと言先ほどの不安そうな表情とは打って変わってぱっと明るく咲き、彼に飛びついてきた。

「うわ、え！？ 何、何なんだ！？」

「私は雪城鈴と言います。よろしくね！」

鈴に抱きしめられた胸の中で自己紹介をされた。色々なシチュエーションがあるだろうが、こんな積極的な自己紹介をされたのはイツキが初めてだろう。

「ユキシロスズさん……？」

いきなり抱きつかれたイツキは思わず振りほどいてしまう。

「そう、雪城鈴」

「ええと……、俺とどこかで会ったことありましたっけ……？」

「多分あると思う」

イツキはこんな美少女、一度も会ったことなどない。会ったことがあるのならそれこそイツキがしかと覚えているはずだ。でもそんな記憶全くない。どれだけ脳内ハードディスクを洗い出しても『雪城鈴』と名乗る目の前の彼女は検索に引っかからない。しかし彼女は名乗っていないはずのイツキの名を知っていた。これはどういうことだろうか？とイツキも考えてしまう。

「何で俺の名前を……？」

「わかんない」

簡潔な返答。だが『わからない』ではイツキも何も分からない。そして続けて鈴はとんでもないことを言っただけ。

「私、記憶がないんだ。だから、何でイツキの名前を知っているかなんて私自身も全然分からない。ただほんの少し、断片的に残っている記憶にイツキがいた」

いきなりとんでもないカミングアウトを受ける。記憶喪失など、彼にとっては予想外の展開。テレビやアニメの中でのできごとでしかなかった、非常にリアリティの薄いものだ。

「はぁ！？ それってつまり、記憶喪失！？ ウソだろお！？」
もちろんいきなり信じられるものではないに決まっている。

「ウソじゃないよ！」

そんな否定の言葉だけで彼の信用に足るものではない。否定するだけならば誰にでもできる。

「……そんなこと言われてもなぁ……。じゃあ、とりあえず警察に行く……？」

「それはダメ」

即刻大否定。

「え……何で……？」

「そうなってしまったら、私はイツキと一緒にいられなくなるじゃない！」

言葉の意図が分からない。

「一緒に居られなくなる」という発言は、雪城鈴自身に「イツキと一緒にいたい」という明らかな意思表示があることを示す。

「『一緒にいられなくなるっ』て………?」

「お願い！」

急に手を取られる。ギュッと握られたその感触はとても柔らかかった。

「え、あ、ちょっと……」

「イツキと一緒にじゃなきゃダメなの！ 一緒じゃないと、私は……！」

『私は』の後に続くセリフは鈴の口からは出てこなかった。

ただ、その訴える鈴の目はとても彼の心を激しく動かすものであった。

どこか泣きたくなるような、感傷に浸っているかのような、そんな思いに駆られる何かがあった。

可憐で儚い彼女が、今手放してしまうと消え去ってしまいそうな感じがして。

小学生の頃の夏休みの記憶のような、思い出すと涙が流れてしまうような気持ちにさせられる何かがあった。

彼女の話したことが全て真実だという証拠なんてどこにもない。

だが、彼女がウソをついていないということは本当だと彼は思った。

「……わ……」

言葉を紡ごうとする彼を、今にも泣き出しそうな瞳でしっかりと見つめる雪城鈴。

「わかったよ……」

——これが、すべての始まり。

因みに雪城鈴が無理やり神村イツキの一人暮らし宅に押し寄せて

くるのはこの数分後の話。

もし記憶喪失の少女がゲームをする

ある日、鈴はまた新しいものに興味を持ちだした。

テレビの横に置いてあるゲーム機を引っ張りだしている。

「……何これ？」

鈴が引きずり出してきたゲーム機は「プレイスターズ3」。某有名ゲーム会社が去年発表したばかりの最新のゲーム機。インターネットのアクセスはもちろん、アカウントの作成より他ユーザーとの交流やオンライン対戦などを実現可能にした、まさに夢の次世代機だ。イツキもこれでよく遊んでいたのだが、鈴が来訪してからは毎日がハラハラだったので、そんな暇もなくなってしまっていた。

「ねえねえ、イツキ。これ何？」

少し埃がかかってしまっているそれを、鈴は手で軽く払う。

「ああ、ゲーム機だ。プレイスターズつつつても分かんねえよな。これをテレビに繋げて遊ぶことができるんだよ。そういや最近やってなかったな」

それを聞いた鈴の目はキラキラと輝いていた。

「今できる？ 今遊べる？」

「ああ、できるけど、するか？」

「うん！！」

鈴は初めてのものに触れたり体験したりする時、とても元気の良いい純真無垢な返事をする。今日もそれは健在だ。イツキはそんな鈴を微笑ましく思う。

「じゃ、どれがいい？」

イツキはゲームが大量に入っているプラスチックケースを持ってくる。鈴はそれが床に置かれるやいなや、そのゲームがぎっしり詰まった宝箱を爛々と輝いた目で覗き込む。

「いっぱいあるね！」

「そうだな、俺ゲーム好きだからなー。で、どれがしたい？」

「私が選んでいいの？」

「いいよ」

鈴は「わーい」と喜びながら、ガチャガチャと中身を漁る。

イツキはいろいろなジャンルのゲームを持っている。アクション系、RPG、レース、スポーツ、格闘ゲーム。

そして、もちろん……

「ねえ、これは何？」

鈴が奥底から引っ張り出したゲームのパッケージにはいかにも美少女といったキャラクターが描かれている。

「あ」

「何何？ これはどうやって遊ぶの？」

鈴が引き当てたもの。それは――

『ときめいて！ マイスクールライフ』

恋愛シミュレーションゲームだった。

女の子にこの類のゲームを見つかってしまうのは少々恥ずかしい。それがたとえ記憶喪失の少女であっても、気恥ずかしさを感じざるを得ない。

「こ、これは……」

イツキのミスだ。

これがあることを完全に忘れていた。そしてよりによって鈴がこれに興味をもつという不運まで重なってしまうとは。彼は心のなかで嘆いた。だが別に彼にやましいことがあるわけではない。ゲームが好きな人間としてすべてのジャンルに触れておきたかったただけだ、というのが彼の言い分だ。やましいことがないのだったら、別に口ごもってしまうことなんてないと思うものの、やはりため息は出てしまう。

「……これは、その、女の子と会話して、気に入った人を恋人にす

るゲーム……」

それでもやはりイツキは少し気まずさを覚える。女子に説明するなど、実際には恥ずかしいものだ。

「ふうん？ それって面白いの？」

「お、面白いっていうかな！ あの、アレだぞ！？ 俺は色んなジャンルのゲームに手を出したかっただけで！ そんな、これが好きとか……」

「なんかわかんないけど、これにしよう！ イツキ、これにする！」
誰も責めていないのに勝手に言い訳を始めるイツキを尻目に、鈴はこのゲームをすることに決めてしまう。

「……………！」

「どしたの？」

イツキは観念する。本当にやましい気持ちはないので別に構わないのだが、やはり気恥ずかしい。鈴から『ときめいて！ マイスクールライフ』を渡してもらい、ゲーム機にセットする。

「コントローラーのボタン操作は分かるか？」

「ん。ま、だいたい。押してる内にわかってくるでしょ」

適当にボタン操作の練習をする鈴。おかげでオープニングムービーがスキップされる。次に名前の入力画面が出てくる。

「えと、「ゆ」……「き」……」

順調良く自分の名前を入れる。ただこれは男向けの恋愛シミュレーションゲームなので鈴本人の名前を入れると少々変なのだが、イツキはその辺は目を瞑る。

「あ、始まった！」

ゆきしろすず『俺はゆきしろすず。この学校が今日から俺の――』

「……『俺』だって。主人公は男の子なのかあ」

恋愛シミュレーションゲームをする人は大体が男である。

イツキはあえて静観。

初めてするゲームに口を出されることはゲーム好きにとっては流罪に値する行為だと思っているからだ。

ゲームは会話中心ということもあって、何ぶんつまる所もなく進行していたのだが……

藤田あかり『あ、すずくん！ 今日是一人で帰るの？　じゃあ一緒に帰ろうよ！』

本作ヒロイン藤田あかり。彼女を落とすことがこのゲーム最大の使命だ。

「この人さっきからしつこくない？」

まさかのクレーム。

ヒロインからアタックしてくれているのに邪険に扱う鈴。

ゆきしろすず『うるさいな、俺は一人で帰りたいんだ』

藤田あかり『ご、ごめんなさい。そうよね、一人でいたいときもあるわよね……』

「ふふん、言う時は言ってやらねば！　でも拒否の選択肢が何でキレ口調なんだろ」

してやっつかりのつもりの鈴。

その非情な返答の選択に、イツキは藤田あかりに同情する。

その後鈴は暴虐の限りを尽くした。

体育祭では必死にアプローチをかける藤田あかりを振り切り他の女子と組んで優勝。帰り道のたびに最悪の選択肢。会う度に拒否の選択。更に他の女子にも気があるふりをしてはデートの日は家に引きこもるなどの謎行動。これでは誰も寄ってくるはずがない。

そして、当然結末は――

ゆきしろすず 『結局、俺の青春は誰とも付き合うことのない灰色の学生生活で幕を閉じてしまった。ああ、もう一度最初からやり直すことが出来ればなあ……!』

～ B A D E N D ～ 【データを消去しました】

「……」

「……」

悲しいBGMが流れる。

「……イツキ」

「え？ あ、ぞ、残念だったな！ でもまあ初めてだし、仕方ないっというか！」

「このゲームつままない」

そう言くと、すぐにゲーム機からソフトを引っ張り出してパッケージにしまい込む。少し不機嫌そうな感じがする。

「女の子はダメだね。こっちの心理、ひとつも分かってくんないんだもん！ 冷たくするのも戦略っていうじゃない！ そんな基本的なことも分かんないなんて、所詮は機械だよ！」

記憶喪失の女の子におもいきり叩かれる『ときめいて！ マイスクールライフ』。しかし最悪な選択肢を選びまくった鈴に原因があるのは一目瞭然だ。ただ、それを今ご立腹の鈴に言うときと怒るだろうから、イツキはそれ以上の言葉を口にしなかった。最後には「藤田あかりはロクでもない男を掴まされるね」などという捨て台詞まで吐かれる始末。鈴は藤田あかりに何の恨みがあるのだろうか。とイツキは勘ぐってしまう。

「次行こう、次！ ああいうのは私には合わなかったんだよ！ きつと！」

再びゲームの山に手を突っ込んで、次なるゲームを探す。

「これは何？」

鈴が手に取ったゲームは『列車にGO』。

日本各地の鉄道をリアルな背景を鑑賞しながら走る、運転士気分を味わうことのできるゲームだ。

「電車のゲーム」

「電車を運転するの？」

「そうだよ」

「おもしろそう！」

早速ソフトをセットする。

5分後

「？ コレ、なんて読むの？」

画面には『GAME OVER』の文字。

「ゲームオーバー……」

「えー！ もうダメなの？」

「そりゃそうだよ！！ 開始早々120キロ全開で走りだす丸の内線って聞いたことないよ！ いきなりATS作動じゃねえか！！」

南阿佐ヶ谷駅の乗客乗せる気なさすぎだろ！！」

ATS…自動列車停止装置。

電車が信号などを無視して冒進した時、暴走運転を行った時など、危険を察知した際に強制的にブレーキをかける装置。これが発動したということは、鈴は完全なる暴走運転士であったということだ。

「……………面白くない。全然うまく行かないんだもん」

ぽつりと一言呟く。

「最初のうちは仕方ない部分もあるけど、鈴の場合はヒロイン冷遇だしいきなり電車暴走だし、なんというか擁護する点がないよなあ」

鈴はコントローラーを傍らにおいて、首を捻り体操をしている。

「こんなに面白くないものにハマるなんて、イツキはドMなの？」
「違よ！！」

その後イツキは狙撃ゲームを鈴とタッグでやってみたが、彼女に至近距離で銃殺されたからすぐに止めた。

決戦前夜

鈴が台所で何かを作っている。

いつものだらしのない格好にエプロン姿が異様に似合っている。台所からは何かをかき混ぜるカシャカシャという音が聞こえてくる。イツキはその姿を後ろから眺めるが、その瞳は心配の文字で埋め尽くされていた。

「でーきたー！！」

鈴が冷蔵庫から取り出した料理を頭上高く突き上げる。どうやら冷やして完成するものだったようだ。そしてクルツとこちらを向くと、小走りでそれをイツキの見守る居間まで持ってきた。

「……これは杏仁豆腐？」

「そうだよ！
作ったから食べて！」

ちよつと茶色っぽい。イツキの知っている杏仁豆腐はもつと白い。

「何か茶色っぽいんだけど」

「隠し味だよ」

「隠れてないな。結構自己主張してるぞ」

真ん中のさくらんぼが砂場に放置された赤いスコップのようだ。

鈴は「いいから食べてみてよ!」とイツキを促す。いつもは鈴のハズレくじを思いっきり引かされるイツキだが、今回の杏仁豆腐の茶色の原因はシナモンの可能性がある。それならば間違っても甘すぎるだけで済むだろうと、イツキはスプーンを進めることにする。

イツキが杏仁豆腐をスプーンで掬い口に運ぶさまをワクワクしながら見つめる鈴。

#99

ぜんざいやお汁粉に少量の塩を加えると甘さが引き立つというのは事実。科学的にも証明されている。鈴はこれを覚えていたのだ。今回の事件はうろ覚えだった故に招いた惨事だと言えよう。

「……あのなあ、そういうのはあくまで隠し味程度なんだよ……。ぜんざいに大量の塩昆布がついてきたら嫌だろ？」

「うーん……。それでも私なら全食べちゃうかも」

鈴は細身ながら意外と何でも食べる。

「そ、そうか。で、塩は分かる。山椒とコシヨウと唐辛子も百歩譲って分かるでしょう。だが納豆！ これは何のつもりだ？」

ひき割りだったためあまり目立たなかったが、不味さの根源にはこの存在が大きかったのだろう。

「好きだったから」

「納豆はフルーツじゃありません！」



杏仁豆腐はそそくさと冷蔵庫に片付けられた。神村家の家訓には『食べ物を粗末にするべからず』というものがある。幼い頃からその教えの下に教育を受けたイツキは今回の塩辛いタイヤのような味のする杏仁豆腐も捨てられる決心がつかなかったので、少しずつ食べて処理する方針を採用した。

「鈴が作ったんだから、鈴も手伝えよ」

「えー……」

明らかに嫌そうな表情を見せる。

「『えー』じゃないだろ！ 製造物責任法に則った正当な裁定だ。本当は鈴が全部食って欲しいくらいのところを譲歩してやってんだから、文句言わない！」

「PL法ってやつだね。仕方ないな」

「おお……、そう、それ」

所々覚えている鈴にたまに驚かされる。ましてやPL法などとい

った一般人にはあまり縁のない法律名だ。もしかすると鈴は記憶を無くす前は博識だったのかもしれない、と彼は思った。

「そもそも、何でいきなり杏仁豆腐なんて作ろうと思ったんだ？」

「調理実習の練習」

イツキは思い出した。明日の金曜日、家庭科の時間に調理実習があったのだ。

「ああ、そういやそんなのあったな」

「そうだよ、女子としてここで女子力があるところを証明しとかないとね！」

「女子力ないところを思いつき俺に見られた後だけだな」

鈴はハッした表情を見せる。

「い、今のは無効だよ！ さすがに！」

「何がどう『さすがに』なんだよ……。そもそも鈴が半ば無理矢理に食わせる展開に持っていったんじゃねえか」

「――！ とにかく！ 今のは無効なの！」

顔を真っ赤にしてムキになる鈴。これ以上責めると鈴の機嫌がとて悪くなるのをイツキは知っている。なので言及するのはここで打ち止めにしておいた。

明日（次話）は調理実習。

調理実習！

私は流浪の剣客……。

今宵も血を啜らんとする我が刀の赴くまま、流離い歩く……。

突然、後ろから刺された。

私は死んだ。

「——という夢を見ましたッ！」

「……鈴、何か不満があるなら謝るよ……？」

清々しい朝である。



朝ごはんには昨夜作成された塩辛いタイヤ（杏仁豆腐）が食卓に

出された。イツキは覚悟を決めて一気に水で流し込んだからまだ良かったものの、その味を甘く見ていた鈴は聞いたことのないような唸り声を上げながら涙目で完食していた。そのせいでテンションの下がった二人はそのまま学校へ向かったが、学校が近づくに連れ鈴は徐々に元気になっていった。対するイツキはテンションの低いまま。切り替えがきちんとできる鈴を羨ましく思いながら校門をくぐった。

「次は調理実習だね！ 鈴！」

3時間目の休み時間。

クラスの生徒たちが家庭科室へ赴く中、早坂千秋が鈴に話しかけてきた。千秋は肩ほどまでの髪の毛と健康的な可愛さのある、イツキと鈴の同級生だ。鈴ととても仲が良い。

「うん！ 昨日練習しちゃったよ！」

「ええ！ やる気まんまんじゃん！ ケーキ作ったんだ？ 班が一緒だから心強いなあ」

「え……………」

「……………」

千秋は少しだけ首を傾げる。

「……………」

鈴は明らかに項垂れる。漫画で表すならば、うつろな目の辺りに黒の縦線が何本も入っているといったところだ。

早坂千秋は悟った。鈴の沈黙が何を物語っているか、手を取るように分かった。

「――あ、す、鈴！ 大丈夫だって！ たとえ違うものを作ったとしても練習したことに価値があるんだよ！」

「そうかなあ……………」

さつき肯定の返事をしたのに、肩をすくめて直ぐにミスを認める鈴。千秋はそんな素直な彼女を同性ながらも少し可愛く思ってしまう。その会話を後ろで聞いていたイツキは、先程に増してテンショ

ンの上がる要素をえぐり取れた気分だった。「俺はただ鈴の失敗料理を食べさせられただけだったのか」という、結局何も収穫のない犠牲を払ってしまったことになったのだから、そんなふうな気持ちになるのも分らないでもない。だから友人に「どうしたんだ？調子悪いのか？」と聞かれても、イツキは作り笑いを浮かべて「何でもないさ」と答えるくらいの対応しか出来なかった。

家庭科室には2×3の配置で調理台が設置されている。雪城鈴、神村イツキ、早坂千秋は偶然にも同班。5人班が基本なので、後二人は男子が編入されている。

「な、なあイツキ！俺達ラッキーだよな！」

「へ？何が？」

そわそわする友人二人。

「だってよ、ロリ巨乳童顔の鈴ちゃんに超可愛い千秋ちゃんと同じなんだぜ！？ああ、他の男子の舌打ちがまるで祝福の喝采のように聞こえてくるようだ！」

イツキの左に座っている男友達二人が勝手に小声で盛り上がっている。

鈴は身長147センチながら、それに似合わない胸を携えている。だからイツキは彼女の風呂上りの時など視線のやり場に困ることが多々ある。鈴はそういうことに無頓着なところか、からかってくるのでいつも対応に困っている。

「——！——だよなあ！お前もそう思うだろ？イツキ！」

「え？あ、ああ。そうだな」

脳内で鈴の苦労話に花を咲かせていたイツキは友人二人の会話など完全に黙殺していたので相槌だけしか打つことが出来なかった。二人は鈴と千秋に憧憬を抱いているようだ。いや二人だけでなく、鈴と千秋はクラス中どころか学年単位で人気がある。だが、千秋はよしとして、彼らは鈴の蜜行の数々を知らないから憧れを抱けるのだ。ついこの前も買ってきたばかりの香りつきの石鹸を食べ物だと

勘違いして齧っていたし、炭酸飲料を劇薬だと思っていたらしいし、赤ペンを見て「血だ!」と騒いでいたし、モニターがパソコン本体だと思っていたらしいし、赤信号は『覚悟を決めて渡れ』のサインだと思っていたくらいだ。鈴は彼らが想像するお姫様のような優美で嬋媛な女性ではない。少なくともイツキはそう思っているのだから、そんなこと考えるんだよ」と心のなかでため息を付いてしまう。だがそんなことも口に出して言えるはずもない。彼が鈴と同居していることがバレるのは絶対に宜しくない。記憶喪失と同じくらいトップシークレットの機密事項だ。これがバレてしまえば騒ぎになるどころの話ではないだろう。鈴もそのことはイツキから厳しく言われているので決して口にすることはない。

ホワイトボードには「チーズケーキの作り方」とでかでかと書かれている。その文字を見た鈴は、またひとりで小さく落ち込む。

「鈴は間違って何を作っちゃったの?」

うつむく鈴に優しく問いかける千秋。

「……塩辛いタイヤ」

「何それ!?!」

因みにこの早坂千秋は小学生の頃のイツキの幼なじみ。偶然にも高校で再会することができたのだが、当時より増して数段以上も可愛くなった千秋を見た時の衝撃はイツキの胸にまだ印象深く残っている。

先生が各自指示を与え、調理実習はスタートする。

【ベイクドチーズケーキのレシピと作り方（一人分）】

- ・クッキー（市販） 50 g
- ・バター 30 g
- ・クリームチーズ 250 g
- ・サワークリーム 50 g

- ・グラニュー糖 70g
- ・卵 1個
- ・生クリーム 100g
- ・レモン汁 小さじ1
- ・薄力粉 10g

？クリームチーズをレンジで柔らかくしておく。同時に薄力粉もふるいにかけておく。

？クッキーを砕き、溶かしたバターを加えて揉み合わせる。（これがケーキの一番下の生地になるので、型に敷き詰めておく）

？ボウルにクリームチーズとサワークリームを入れて、よくかき混ぜる。

？グラニュー糖を2，3度に分けて加える。

？更に薄力粉も追加し、混ぜる。

？次に、卵を2回に分けて加えかき混ぜる。

？完了したら、同様に生クリームも2回に分けて加え、かき混ぜる。更にその後にレモン汁も加える。

？？の上に？？で完成したものを流し込む。

？170℃のオーブンで50分焼き、完了後適度に冷やす。

完成！

（『甘

味王のレシピ』様より）

調理は滞り無く行われた。

イツキなど男子二人はかき混ぜる等の力仕事を任され、全体の指示は千秋、鈴は細かい仕事を任された。鈴に細かい仕事を任すのはとても危険だと思っていたイツキだが、今回は周りに塩などの余計な調味料がなかったので鈴も迷うことなくすることができているみたいで安心して見ることもできた。逆にクッキーを粉々に砕きす

ぎた男子達が千秋に注意されるくらいが唯一の失敗で、鈴は何もおかしいことをしなかった。それどころか一度見たレシピを間違うこと無くそのまま実行し、とても手際がよく見えた。塩タイヤを作った本人とは思えないほどだ。元々杏仁豆腐だって調味料を大量投入したからあのような食べ物ではない味になっただけで、形としてはきちんとしていたのだ。食感も確かに杏仁豆腐そのものだったのだ。以上の観点から考えるに、鈴は実は料理が上手いのではないかとイツキは完成したケーキを食べながら思う。

「美味しかった！ やっぱり美少女が作る手料理は最ッ高だな！」
「おうよ！」

と男子二人はとてもご満悦の感想を述べる。

「鈴、料理上手いじゃない！ 何か学校でも通ってたの？」

千秋は男子達が洗う食器を拭きながら鈴に問いかける。

「？ 学校なら今も通ってるよ？」

「へえ、そうなんだ！ 道理で上手いと思ったよ」

千秋はすっかり感服しているようだが、鈴は料理学校になど通っていない。通っているわけがない。イツキの家で同棲（内緒）しているのに、鈴を料理学校に通わせられるお金があるわけがない。「また勘違いしてやがるな……！」と声にしたいけどしてはいけない状況にもどかしさを感じまくるイツキ。きっと鈴は千秋が尋ねた『学校』を『高校』だと勘違いしたのだろう。記憶が細切れになっっている鈴に『料理教室』などという概念などが存在していないとしても不自然ではない。

「ね、イツキ！」

流し台で食器を洗うイツキの横で、洗い終わったそれらを拭いている鈴が話しかける。

「美味しかった？」

「ああ、美味しかったよ」

「女子力、証明できたかな？」

「十分だろ。御見逸しまし——」
ふとイツキは鈴の顔を見る。

「良かったあ!!」

雪城鈴の満面の笑み。

「————!!」

イツキは思わずドキッとしてしまった。
いつも見ている鈴がこんなにも可愛く見えるなんて、思いもしなかった。とんでもない不意打ちだ。

思ってみればこんな美少女とひとつ屋根の下で暮らしているのだ。ずっと忙殺されていたイツキだが、冷静に思い返してみれば世の男性からデモが起きてもいいくらいの幸運。

「お、おう……」

イツキは照れ隠しで視線をそらす。
今まで感じたことのない不思議な感覚だった。

鈴は勉強ができない？

今日はクラス全員の気分が重い。まるで葬式でもあったかのような雰囲気だ。あの鈴でさえ空気を察していつもの元気を抑えているような感じがする。早坂千秋は普段と何ら変わらない様子だが、彼女は別だ。この案件とは全く縁のない、別世界に住む人間だからだ。しかしクラスの九割五分は残念ながら関係者。神村イツキもその内のひとり。逃れる術などなかった。

「それじゃテスト返すぞー」

―― 一学期中間テストの返却の時間！ ――

先生は出席番号の若い順に次々と生徒を教卓前に呼び出し、点数の書かれた、もはや宣告書と化したテストを容赦無く返却する。先生はテストを返す際に一言ずつ感想というかコメントをつけている。項垂れる生徒や安堵の表情を浮かべる生徒、天国行くと地獄行きが分かれる瞬間だ。

「イツキ、どうだった？」

休み時間になり、早坂千秋がイツキの机の前までやってきて話しかけてきた。彼女はいつも点数が良い。高得点マニアかと言わんばかりに80～90、もしくはそれ以上の点数を叩き出してくる。そのことは高校1年生だった時の千秋の成績表を見ればよく分かる。

「65点」

「超普通だね」

「そうだな。欠点じゃなくて良かったよ」

欠点は39点以下の点数を指す。この点数をとってしまうと、学業単位に響いてしまうので生徒たちはこの数字を忌み嫌っている。

「千秋は何点だったんだ？」

「92点」

「聞かなきゃ良かった」

「ちよっと！ 聞いたって何よ！」

黒板はまだ日直によって消されておらず、先生が書いた最高点が誇らしげに残っている。その点数は『92点』。早坂千秋のそれだった。

「ちよっと答案見せてよ」

早坂千秋はイツキに自分の答案を手渡す。几帳面に折りたたまれたそれを開けてみると、当たり前だがほとんど正解の丸がついている。しかも点数が引かれているところは三角だけであって、バツは一問もなかった。

「……。外国なら千秋は8点だな」

外国では丸を不正解、チェックを正解としているところがある。

「残念日本でした」

「はあ。なんでそんなに点数良いかなく……」

イツキ自身も不毛な問だとは分かっているのだが……。

「勉強したから」

その通りである。それしかない。

ただイツキも勉強をしてない訳ではない。自分が納得行くまでとはいかないが、それなりにはきちんとしている。点数は見ての通り、何も栄える所もなく収まってしまう。65点は誇るほどの点数ではないが、別に恥じるような低得点というわけでもない。だが幼なじみがクラス最高点を取ってしまったのは、イツキの自尊心を軽く突付くものがあるのだろうか。どこことなくやり切れない表情を浮かべる。

「鈴はどうだった？」

鈴はイツキの右斜め前の席に座っている。席が近いのは彼女にとってもとても都合なので、この幸運には感謝している。

「どうって、何が？」

「テストのことよ」

「そう、テスト。何点だった？」

因みに今日返却されたテストの教科は英語。高校2年生の彼らに課された内容は決して簡単なものではない。しかも彼らの通う高校は俗にいう『進学校』であるということからも、その難易度が中々に高く設定されているのは御察しできるだろう。

「ああ、テスト。さっきのだね」

そう言うのと、おもむろに机の引き出しからテストを引っ張り出す。

「6点だった」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？」

大絶叫。

6点。

100点満点中、6点。

千秋が焦りながら、「ちょっと見せて！」と鈴から答案を奪い取る。

「……本当に6点……………」

イツキも千秋の奪い取った答案を見たが、紛いもなく6点だった。大絶叫の後の不気味な沈黙。

「……ねえ鈴、勉強した？」

顔を引き攣らせながら千秋が尋ねる。

「してなかった」

ケロリと答える鈴。状況のヤバさが分かっているようだ。イツキもその鈴の発言通りの記憶しかない。確かに鈴は勉強など全くしていなかった。『ときめいて！ マイスクールライフ』で藤田あかりから逃亡する日々を送ったり、塩タイヤ作成に精を出していたり、勉強している描写など全くなかった。こう思い返してみると、この点数はさすがに当然の結果だ。

「ええー！ ダメじゃない！ ちゃんと勉強しなきゃ！」

自分のことのように焦る千秋。イツキも内心は焦りまくっている。まさか鈴が勉強のできない子だったなんて思いもしなかったのだろうか。そもそも勉強以前に記憶がないのだから、そんな努力は最初から無駄だったのかもしれないが。

「えへへ」

「『えへへ』じゃないだろコレ……。ていうか逆に何が合ってたんだ？」

鈴の答案をくまなく見る二人。

『問12 イ』

これに丸が付いていた。

「おい！ イて！ イてエエッ！」

「勘で書いたら合ってたんだ！ 天も見捨てたもんじゃないねえ」

「見捨てられまくってるよ！ これでもかかってくらい見捨てられてるよォ！」

『裏面 問40 イ』

「……鈴、分からなかったら『イ』にしてるの？」

「恐らくは」

「自分で書いたのに何で他人事みたいな言い回しなんだよ……」

この2問で6点。それ以外は紛れも無く全てバツ。面白いくらいに全部バツ。三角さえ与えられない程にバツ。バツの嵐だった。

『次の和文を英文にせよ。 1… 私たちは世界中の恒久の平和を心から願っている。』

【鈴の答え】

『We are pessi!』

鈴に回答を返す際に一瞬だけ見えたこの答えに、イツキは戦慄を覚えた。

「鈴！　鈴！　これはマズいって！　先生のところ、相談に行こ？　ね？」

千秋は他人事ではない様子で心配する。確かにこれはとてもマズい。イツキもこの意見には大賛成で、半ば強引に鈴を職員室まで引っ張っていった。

「失礼します」

3人は行儀よく扉を開け、挨拶と一礼を済ませる。

「あの、先生」

「おお、どうした？」

顎にうっすらと髭を生やした、40代前半の英語教師。愛嬌のある顔と陽気な性格でクラスの皆からも慕われている先生だ。

「あの、雪城さんのことなんですが」

「ほら鈴、自分のことなんだから自分で言えよ」

イツキに肩を押されて最前面に押し出される鈴。

「……あの、私は6点なんですけど、大丈夫なんでしょうか？」

鈴の6点発言に思わず再び吹き出しそうになるイツキ。これは少しジワジワくるものを感じているようだ。だが千秋の「笑ってられる状況じゃない！」という視線に気付き、こみ上げてくる笑いを必死に噛み殺す。

「ああ、ま、大丈夫じゃないか？」

先生の口から出てきたのは、彼らの予想を良い意味で大きく裏切

るものだった。

「そうですか！　ありがとうございます！　ね、二人共、私だいじよ——」

「何で！？」

イツキと千秋は同時に尋ねる。先生はその剣幕に一步引いてしまふほどだった。

「だ、大丈夫なもんは大丈夫なんだから仕方ねえだろお？」

「6点ですよ！？　6点！！　このままじゃ雪城さん、留年しちゃいますよ！」

1年を通しての各教科の平均点が39点を下回ると自動的に留年が決定してしまう。

「……雪城の現在の英語の平均点は53点だ。転校生はお前らと違って入試の点数も大きく考慮されるんだよ。その結果分の貯金があるから、まだ大丈夫だ。ま、6点には俺も笑わしてもらったけどな」

二人は「え……」と言葉を失ってしまった。

6点をとって平均点を53点にする方法。

簡単な方程式だ。

$$(6+X) \div 2 = 53$$

「100点……？」

イツキと千秋は驚嘆してこれ以上の感想を述べることが出来なかった。あの「We are pessimist！」などと真剣に書くような子が、進学校の受験で100点。とても信じられなかったが、先生が嘘をつく義理もない。しかも、本当に紛れも無い真実なのだから認めざるを得ない。

「なあ、鈴。おまえ……」

振り返ると鈴は何でもないような表情で二人を見ていた。

「ね、心配なかったでしょ？」

可愛らしげに微笑む鈴。

受験は、おそらく鈴が記憶喪失前に受けたものだろう。

——記憶喪失前の彼女は一体、どんなヒトだったのだろうか？

鈴の謎がまたひとつ増えた瞬間だった。

鈴は勉強ができない？（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

幕間 ～一学期中間テスト 鈴の誤回答集～

～～幕間～～

鈴の誤回答集

【英語】 点数…6点

☆次の和文を英訳せよ。

問…『現在のアメリカにおける経済政策は、日本に多大な影響を与える可能性が高いものである。』

【鈴の答え】

『The economy of America will be Japanese.』

問…『10時から12時は車の通行が多いため、この通りを渡るときは注意しないといけない』

【鈴の答え】

『(Th↑消した跡) イ』

☆次の英文を和訳せよ。

問…『We were not able to believe the occurrence which happened in the gym』

【鈴の答え】

『ジムの体内では私達が信じられないことが起こっていた』

【国語】 点数…84点（クラス3位。現代文満点、古文全滅）

☆次の古文を現代語和訳せよ。

問…『つれなき顔なれど、女のおもふことといみじきことなりけるを、』

【鈴の答え】

『つれない顔をしているけれど、女が思うことっていつも顔に出ないのでしょ』

問…『次の単語の読みを書け。』

？蔵人 ？上達部 ？刀自 ？女御

【鈴の答え】

？クロード ？じょうたつぶ ？ばじ ？によご

【数学】 点数…86点（クラス2位。計算問題応用問題は全て正解。特殊な方程式を使う部分は全滅）

問… $0 \leq \theta < 2\pi$ のとき、 $\cos(2\theta - \pi/4) \parallel \sqrt{3}/2$ を求めよ。

【鈴の答え】

『解なし』

その後分からない問題には全て『解なし』と回答。

【生物】 点数…46点

☆次の生物の名前を答えよ。(写真)

答え…？ボルボックス ？ミジンコ ？ミカヅキモ ？ゾウリムシ
？プラナリア

【鈴の答え】

『？リーゲルシュライダー ？虫 ？ヒューイット ？ゲアー ？
シェンデロス』

問…『個体がホモ接合体YYの遺伝形態を答えよ』

【鈴の答え】

『死』(正答…致死遺伝子)

【日本史】 点数48点

☆空欄を埋めよ。

問…() は洒落本の作者であり、() は黄表紙作者である。

【鈴の答え】

『(馬子) は洒落本の作者であり、(馬子) は黄表紙作者である。』

問.. 大津事件で負傷したロシアの帝国大使は誰か。

【鈴の答え】

『チェブラー○カ』

計5教科270点、全教科平均点54点。

学年158人中76位。

普通……？

幕間　ゝ一学期中間テスト　鈴の誤回答集ゝ（後書き）

話の進行とは全く関係の無い小話です。

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

絶対に負けられない戦いが、そこにはある

一学期の中間テストが終わって、もう5月も半ば。

夏の足音を感じ始めるこの頃は、その前の恒例行事である梅雨がやってくる季節でもある。鈴は雨が降るたびに、つまらなそうな顔をしながら閉めた窓から外を眺めている。鈴は元気で活発な女の子だ。強制的に部屋の中に閉じ込めさせられる雨は、きつと嫌いなのだろう。確かに鈴は部屋に閉じ込めておくよりも草原や野原で自由に駆け回らせるほうが似合っている。例えばスイスのような清涼な高原を白いワンピース、白い帽子で駆け巡る姿なんて簡単に想像できくらいだ。体を動かすことができなくてウズウズしている様子がよくわかる。鈴が深い溜息をつくときは、たいていつまらない時。ついこの前がまさにその時であった。

2時間目が終わるチャイムが学校に響き渡った。

「よっしゃー！」

鈴はガタツというイスの音と共に立ち上がる。

そしておもむろに制服のカーディガンを脱ぎ、リボンを外し、シヤツのボタンに手を――

「――！！！！ ちょ、ちょッ！ ちょつと鈴！！！」

早坂千秋が脱兎のごとく駆けつけ、自分のシヤツのボタンを外す鈴の手をがっしりと押さえる。イツキも急いでその奇行を止めるべく半歩踏み出していたのだが、それでも千秋のほうがずっと速かった。

「何してるの！？！」

「え、着替えようとしたんだけど……」

次は体育の時間。

鈴が待ちに待った体育の時間。

ずっと雨に降られてフラストレーションが溜まりに溜まった鈴が思い切り発散できる体育の時間であったのだ。

「まーだーダーメーだーよーッ!」

千秋は鈴の手を握っていた手を両肩において必死に説得する。

「男子がッ! 男子がいるでしょう!? 何のための更衣室!」

見渡すと、男子の視線は鈴に大注目されていた。不覚にも、止めに入ろうとしたイツキもその内のひとり。いつも鈴と一緒にいるとはいえ、このようなシチュエーションで心躍らないわけがない。あと少しで下着が見えてしまう絶妙のボタン位置まで来て千秋に制止されてしまったものの、逆にその光景が男子としてはそるものがあるのか視線は集まったままだ。美少女が美少女に過ちを犯さないように必死に説得する姿は、その説得内容がどうであれ何処と無く美しく映える。……ような気がする。

辺りを見回す鈴。鈴と目があった男子達は顔を赤らめながら急いで視線をそらす。

「うーん、じゃあ早く行こうよ! 更衣室!」

「分かったけど、ボタンはちゃんと閉めてネ!」

はやる気持ちが鈴を急がせる。

イツキはこの一部始終をほとんど何も出来ずに傍観してしまっていた。彼としても制止に回ったところだが、突然のことで対処が遅れてしまった。イツキは千秋に土下座級の感謝を心のなかで行った。

「なあ、イツキ」

調理実習の時一緒だった男子生徒の友人が話しかけてきた。

「俺は、鈴ちゃんはSだと思うんだ」

「……はあ?」

「見た感じMっぽいのに実はSで、しかもあの誰もが可愛いと認める天使のような容姿! 天は二物を与えたな!」

悟りを開いた哲学者にでもなったかのような口ぶり。確かに鈴の容姿は非の打ち所が無い。

「きっと、ベッドの上でも――」

「お前は何を言っているんだ」

外は快晴。

雨上がりの人工芝の校庭は、雫が日光に反射してキラキラと輝いている。

「鈴は元気だな……」

体操着に着替え終わり、校庭に出たイツキは独り言のようにポツリと呟く。女子と戯れる鈴はとても活き活きとして、気持ちよさそう。それを確認したイツキも少し笑顔になってしまう。

「何、鈴ちゃんを見てニヤニヤしてるんだよ」

「え？ いやいや、そんなつもりは……」

「まあ見るだけなら許してやろう？」

「許す？」

「ああ！ なんてったって『俺の嫁』だからな！」

その発言をしたとたん、彼は男子の渦へと引きずり込まれていった。鈴は人気があるので、そのような発言には注意を払ったほうがいい。イツキは苦笑しながら男子の渦に投げ込まれた彼を見守ることに出来なかった。

「……人気あるんだなあ……」

イツキは鈴の人気を再確認する。

あれだけ人気のある鈴を、日常生活で独り占めしている今の状態。イツキは少しだけニヤついてしまう。

しかも全て内密というところがまた、イツキ的にグツとくるものもあるようだ。普段はそんなことを鈴に悟れられないような言動をしているが、内心ではニヤつきが止まらない。

「はい、じゃ、今日はひっさびさに晴れたことだし、サッカーでもするか！ じゃあ男子と女子に分かれてー」

上下ジャージ姿の先生が首に笛をぶら下げながら指示を出す。

「わーい！ サッカーだ！」

思いつ切り体を動かせるサッカーは鈴にとっては好都合。イツキは彼女の喜ぶ様子を見て、「サッカー、覚えてたんだ」と脳内で率直な感想を述べる。

女子たちは4チームに分断された。1チーム4人。

「頑張ろうね！」と声を掛け合う鈴とそのチームメイト。

【Aチーム対Bチーム】

Aチームには雪城鈴、Bチームには早坂千秋が所属している。

早坂千秋は容赦などしない。勉強も容赦はないし、小さな勝負事だって容赦はしない。ましてや目に見えて点数という数字で現れるスポーツなんて、容赦するはずがない。これは彼女なりの流儀なのだ。どんなことであれ、手を抜くことは相手にとって失礼なことであり、同時にそれは自分の予防線となってしまう。この理念に従う千秋に、勝負事で慈悲は期待できない。Aチームの面々もスポーツ万能の千秋のいるチームを初戦で迎えることになってしまい、早くも諦観が見られている。

「皆、どしたの？」

そんなことを全く知らない鈴はチームメイトに尋ねる。

「千秋が相手にいたら、勝てる気がしないよお」

「そうそう、千秋は運動もできるからねえ」

既に諦観の漂うチームの雰囲気。

「そんなにスゴいの？」という鈴の質問も、質問途中に肯定されるほど。鈴は「よっぽどなんだ」と悟る。だがそこで同じように諦観に染まるのではなく、それどころか「へえ」と不敵な笑みを浮かべた。

五月晴れの校庭、気温24℃、時刻午前10時。

Aチーム対Bチーム、キックオフの笛が鳴り響く――！

絶対に負けられない戦いが、そこにはある（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

意外と真剣勝負

ボールはBチームからのキックオフとなった。

鈴は相手チームの早坂千秋から目を離さずに、味方選手がボールを奪取する瞬間を伺う。だがしかし、一度早坂千秋にボールが渡ると小刻みなボールタッチと一瞬の加速力で鮮やかに抜き去り、最後は一对一になったゴールキーパーまであっさりと躲かれてゴール左に簡単に流し込まれた。

【A0―1B】

「ほら、千秋、凄いでしょ？」

千秋にディフェンスに行っていたチームメイトのひとりが鈴の元に寄る。

「うん、確かにそうだね」

鈴は返事はしたものの、何か考え事をしているようだ。

――Aチームのキックオフ。

Aチームは横一列に並んでフォーメーションを作り、敵がプレスにかかるところでフリーの味方選手にパスをして好機を伺う。しかしそれを行うにはあまりにも人数が足りない。ゴールキーパーでひとり分のフィールドプレイヤーが削られるので、実質ピッチにいてボールを繋げられる選手は3人。更に、横一列で並んでいるので一人でもミスが出れば即座にゴールキーパーとの一騎打ちの場面を作られてしまう。そう言っている内にまたもやパスカットからエースストライカーの早坂千秋にボールがわたってしまい中央をブチ抜かれる。鈴の位置からはいくら走っても千秋に追いつけるような距離ではない。千秋はキーパーの位置を落ち着いて見定め、頭上を抜く

鮮やかなループシュートで本日2点目を決めた。

【A0―2B】

ゴールの祝福を受ける千秋に、やはり諦観色の色濃いAチームの面々。「ああもうだめだ」とか、「何点とられることやら……」などの敗色ムード濃厚な状態。

だが、鈴は違った。2点差を付けられて負けているのだが、「ふん」と鼻を鳴らす。それを見た千秋は「それが負けている人のする表情かしら」と密かに警戒心を強めるとともに、これから鈴が何をしようと企んでいるのだろうとワクワクさせられた。

「ね、皆。ちよつと」

鈴はキックオフ前にチームメイトに何かを告げる。

「……うん、わかった」

「やるだけやってみますかあ？」

2点差もつけられているこの状況。何か策があるのなら、乗ってみるしか道はない。

Aチームのキックオフ。

ボールは鈴が中央でドリブルしながらキープすると、咄嗟に千秋のチェックが入る。鈴もそのことは先ほどまでのプレーで熟知しているので、後方の選手に渡す。

きちんとボールが渡ったことを確認した鈴は思い切り前線を中央から駆け上がった。千秋は後方にパスされたボールにチェックに行きものの、流石にボールより速くは走れないため鈴のパスは成功する。同時にパスを受けたそのチームメイトは思い切り前線にボールを蹴り出した。

（前線へのフィード！ でも大丈夫、後ろにはちゃんと味方がカバーを……）

千秋はチームメイトのカバーに期待していた。

だがしかし、鈴へカバーに行く選手は誰一人居なかった。

他の二人の選手はサイドに張っており、中央、つまり千秋の後ろのカバーは、誰も回っていなかったのだ。

鈴はゴールキーパーが飛ぶ方向とは真逆の方向へボールを流し込み、1点を返した。

「―――!!」

過信であった。

万能すぎる早坂千秋への過信。

これが逆に失点を喫してしまう原因となってしまったのだ。

千秋が中盤を全てカバーしてくれるので、味方選手は両サイドをケアし、全方向包囲網を完成させていた。鈴はそれを逆手に取ったのだ。最初の失点で千秋はボールがサイドにわたっても動かずに、中央でボールの取り合いになると果敢に参加していた。2点目も同じように中央の突破であった。その時もサイドは千秋に連動して少し上がるだけであった。言い換えれば、サイドは千秋のカバーかアシストでしかないということであったのだ。

つまり、彼女の万能さとチームメイトの過信がこの失点を生み出してしまったということだ。

「……二人共、サイドじゃなくて、私の後ろでラインを頼むわ」

千秋の眼光もまた研ぎ澄まされる。

千秋にとっては敗北も許されないが、やはり失点も許されるものではない。自分が対処すべきところを逆手に取られて点を決められてしまった責任も感じている。勝負事に厳しい彼女にとってはたとえそれが『体育の授業』であったとしても、プライドが許さない。

千秋は両手で自分の顔をパシパシと軽く叩き、気合を入れ直す。

【A1―2B】

Bチームは千秋の中央突破戦法を引っ込めた。千秋を中盤中央のバランス的な位置に配置し、ラインを上げ下げして味方を裏に飛

び出させる。

この千秋のパスにいち早く反応した鈴は精一杯に足を伸ばし、サイドラインに逃れる。

スローインとなったボールに相手選手が頭で合わせてゴールを狙うも、チームメイトが競り合ったので頭はボールを捕らえることなく通過したが……。

「！！」

遠いサイドで千秋がフリーになっていた。

「もらった！」

千秋は素早く右足を振りぬく。綺麗なダイレクトボレーだ。

だがそれでも鈴が体を投げ出してカバーに入る。

ボールは勢いを失いゴールキーパーにキャッチされた。

キーパーはボールを所定位置にセツトし、思い切り駆け上がった鈴に浮き球のフライロングパスをだす。

「そこ！」

敵選手が、ボールが落ちきる寸前に鈴にチェックをいれる。

しかし鈴は左足で敵選手の左前にボールをはたいて、自分は相手の右を走りぬき軽々と抜き去り、更に視線で味方選手にパスを出す視線を送る。

「マークついて！」

中盤まで戻っていた千秋がそれに気付いて大声で指示を出す。

しかし鈴はその声に反応し、視線を切って自ら単独突破を切った。

「いかせないよ！」

一気に加速する鈴と、それを止めるべく猪突猛進する千秋。

ドリブルする一方で、フリーランニングの全速力。鈴は追いつかれて横からプレスをかけられるが、体をすくめて左に進路を取ろうと見せかけた瞬間に右へ切り返す鈴のドリブルに翻弄されて振り切られてしまう。

「よし！！ いけえー！ 鈴ー！！」

「止めてえ——！！！」

互いのチームメイトの大声援。

鈴とキーパーの対一だ。

しかし、突如鈴は進行方向へドリブルするスピードをほんの少しだけ緩めてしまった。

「！！」

キーパーはその一瞬のミスを逃さず、ボールを保持せんとばかりに飛びかかる。しかし、それは最悪の判断だった。

——なぜなら鈴はミスをしたわけではなかったからだ。

鈴は一瞬だけ勢いを弱めたボールに半身だけ背を向け、左足、足の裏でボールを進行方向に転がしてそのまま加速し、ゴールキーパーを抜き去った。

ボールは無人のゴールへと吸い込まれる。

「……嘘でしょ……！！」

マルセイユルーレットという技だ。

鈴はそれをいとも簡単にやってのけたのだ。

これには千秋も苦笑いするしか無かった。

このゴールが決まったと同時に、笛が吹かれた。

試合は2―2の同点で引き分けとなった。

「いやー！ 楽しかったー！」

鈴はとてもご満悦なようだ。

「鈴ってサッカー上手なんだねー！ 私、びっくりしちゃった！」
と千秋もすっかり感心している。

その鈴の劇場となった試合を、1年の教室から授業中にもかかわらず熱い視線を送っていた男子生徒がいた。彼は華麗な技を披露しゴールを決めた女生徒を必死に目で追う。

くしゃくしゃになった鈴の体操服から、彼女の名前がかすかに見えた。

「ゆきしろ……先輩……？」

意外と真剣勝負（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

杉崎友一

鈴が下駄箱で騒いでいる。

このままでは朝一からいきなり超目立ってしまう。イツキは急いで鈴を教室まで半ば強引に引きずるように連れていった。

「いきなり喚き散らすなって！　また変なヤツだと思われたのかあ？」

「手遅れだよ」

確かにその通りだ。鈴にも自覚はあるらしい。

「――それで、何を騒いでたんだ？」

「！　そう！　それ！　それだよ！　そのことなんだけど！」

鈴は一枚の手紙を右手に持っていた。

「何これ？」

「下駄箱の中に入ってた！」

下駄箱の中に入っている手紙といえは……。

「す、鈴……、まさかそれって――！」

もしや、イツキの恐れいていた事態が起こってしまったのだろうか。

大前提として、鈴はモテるのだ。

なぜならとても可愛いし、その上に愛嬌もあって胸もある。そんなことイツキは知っている。彼女が男子から抜群の人気を博していることも十分熟知している。だが、彼は完全にタカをくくっていた。「まさか、まだ1学期中だし、鈴は確かに可愛いけどやっぱり変なヤツだし！　そんなことあるわけない！　ないない！」と心の奥底ではそう信じて疑わなかったのだ。だがその恐れていたことが現実のモノになりそうな今、イツキは焦りで世界がぐるぐる渦巻くような感覚に見舞われる。

「ラブレ――」

「不幸の手紙だ――――――！！！」

「なんでだよッ!!」

鈴は嘆きながら机に突っ伏す。

「なんでここまで来て不幸の手紙になるんだよ!? ていうか古いな! 不幸の手紙で! 古いな!!」

※鈴は一昔前のドラマも再放送で見えています。

「だってだって! 不幸の手紙しか有り得ないじゃん! 私不幸になっちゃうんだー! わーん!!」

「鈴の『下駄箱の手紙』のイメージって、それしかないのか?」と思っただが、そんなことを尋ねるよりもっと重要なことがイツキにはあった。

「鈴、中身読んでみろよ」

小声で鈴に伝える。大きな声だと騒ぎになる可能性があるので、イツキは鈴の耳に手を当ててこそ話をするように話した。

「イヤだ! 人の不幸の手紙を見たがるなんて、イツキはとんでもないヘンタイだよ!」

「いや、ゼツツツタイ違うから、読んでみろって」

鈴は全く乗り気じゃないようだ。

「そんなのわかんないじゃん! これで本当に不幸の手紙だったらイツキに5通くらい送りつけてやるんだから!」

想像してみると、とんでもなく鬱陶しい仕打ちである。

イツキはそれでも「大丈夫だから」と無理やりひっぺがして、鈴の机の上にぱっと広げる。

『拝啓、雪城先輩。』

是非先輩にお話ししたいことがあります。

今日の放課後、校門の桜の木の下で待っています。

よろしく願います。

1年3組 杉崎友一』

この手紙はイツキの言うソレであるようだった。

「……新手の不幸の手紙だね」

「まだ言うかッ!? どう見ても違うだろ!？」

確かにこれはどう見ても「不幸の手紙」には見えない。しかしある種イツキにとっては完全に不幸の手紙だった。人気のある鈴を放置していたツケがこんな風に回ってくるなど、イツキは想像だにできなかった。いつも側にいてくれる鈴がいつの間にか自分だけのものになっていくかのような、そんな自分勝手な思いが芽生えていたのかもしれない。何にせよこれは包囲網を張っていなかったイツキのミスだ。手紙の差出人『杉崎友一』には何の罪もない。だから彼が今その手紙を真っ二つに粉碎しようとしているのはとんだお門違いというものだ。

「あ! ダメ!」

鈴はイツキがその手紙を処刑しようとしているのを悟ったのか、さっと取り上げてしまった。

「不幸の手紙は、破ったり捨てたりしたらその人に全ての不幸が――」

「ああああそうだな鈴、そいつは今俺を不幸にしがったとんでもない手紙だったぜ……」

目に生気のない表情に体をゆらゆらと揺らしながら項垂れ、どこからそんな声が出るのだと言わんばかりの低い声で誰にもぶつけられない憤りを噛み殺すイツキ。

「……イツキ、なんか怖いんだけど」

因みに鈴がイツキに突っ込んだのはこれが初めてだったりする。



「……本当に行くのか？」

イツキは金魚の糞のように鈴について行く。
いつもとは逆の光景だ。

「そりゃ行くよ。だってコレ、不幸の手紙じゃないんでしょ？ 違うんだったら、私に用事があるんだから、ちゃんと聞いてあげないと」

「違うけど、俺を不幸にはしたな」

ボソツと呟くイツキの声は鈴に聞こえなかったのか、鈴はチラと視線を合わせただけでハテナマークを浮かべるような表情をするだけだった。いつもは可愛く思うその顔も、『誰かのものになってしまいかもしれない』と思うと、やりきれない思いが脳内をぐるぐると去来するのも無理はない。

「はぁ」と深くため息だっについてしまう。

「あ、あの人かな？」

花も散り、緑色の葉を青々と茂らせる桜の下で、その男子生徒はひとり佇んでいた。

背は高校男子にしては小さく、おそらく160あるかないかほどだろう。

「――！」

だがしかし、二人がこのように一瞬息を飲んだのはこのせいではない。

「あ、ゆきしろ先輩ですか？」

二人に気付き、言葉を一つ一つ丁寧に紡ぎだすようにゆっくりと話す。

「えと……………あれ……………」

『桜の木の下に來い』と書かれて、その通りに來たら彼がいた。ならば目の前にいるこの人物は間違いなく『杉崎友一』であるはずだ。いつもなら「早く行けよ」という主旨の指摘がイツキから飛ぶはずなのであるが、その肝心のイツキさえも鈴と同じ心境になってしまっていた。

「……………どうかしましたか？」

そのおっとりとした端正な顔立ちは確実に女子のように見える。しかもかなりグレードの高いほうだ。更に声までも男か女か分からないような絶妙の高さ。しかし來ている制服はイツキと同じ男子用の制服。

——困惑せざるを得なかった。

「あ、あのさ、もしかして、君が——」

「あ、はい。申し遅れました。私は1年3組の杉崎友一という者です。よろしく願います」

二人は度肝を抜かれた。

俗に言う『美しすぎる○○』というやつであろうか。

はたまた男の娘というやつであろうか。

彼らの目の前にいる杉崎友一は、女子のような容姿の男子であったのだ。

杉崎友一（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

杉崎優香

度肝を抜かれて、ただ立ち尽くす雪城鈴と神村イツキ。

鈴の表情からも伺えるように、記憶喪失であろうと目の前の現実には疑問符を投じるべき事実だということは理解できたのだろう。

概念が取り払われた鈴でさえ驚きの表情を見せてしまうこの光景は、一般人のイツキにはもっとダメージが大きいものだった。全く関係のない話だが、「何故同じ人間なのにここまで差が……！」などということを考えさせられるほどだった。驚き顔を晒しながら固まっ
てしまっている二人に、首をかしげて疑問符を投げかける杉崎友一。
「どうしたのですか？」

物腰柔らかな語調。

言葉を一文字ずつ丁寧に発音する話し方は、まるでクラスの大
人しい女の子のようだ。

「えと、君が杉崎友一『くん』だよね？」

鈴は「くん」なのか「さん」なのか迷ってしまうが、「友一」という名前を信じて「くん」の判断をする。保険として間違いのないようにわざわざ「くん」を強調した。その前に男子用の制服を着ているので迷うはずはないのだが、それでも確信が持てなかったのだ。「はい、私が杉崎友一です。本日は私のためにわざわざ時間を割いてくださって、有難うございます。私のことは「友一」と呼びください」

友一はぺこりと礼儀正しく頭を下げる。小さい背丈が余計に小さく見える。

「あの、突然不躰で申し訳ないのですが、そちらの方は……？」

右手の掌を上にし、イツキの方を指す友一。

「あ、え、俺はその――」

「イツキだよ。神村イツキ」

急に振られて焦るイツキを鈴がカバーする。

「神村イツキさん……ですか……?」

友一に困惑の表情をされるイツキ。確かにこんな男女の色恋沙汰に知らない男がひとりのこのこと付いてこられるのは戸惑ってしまうだろう。イツキは少し申し訳なく思うも、しかしそんなことを言っつてすぐごと引き下がっていいような場面ではない。だが、ここに来たからといってイツキに何か言う権利があるのだろうか。

「そう、イツキ」

「イツキさんですか。初めまして、杉崎友一と申します。今後とも宜しくお願いいたします。私のことは「友一」とお呼びください」
相変わらずとても礼儀正しい杉崎友一。イツキも思わず同じように敬語で「よろしくお願いします」と返してしまふ。

「かみむら先輩は、ゆきしろ先輩の彼氏なのですか?」

唐突且つドストレートな質問にイツキは思いつ切り吹き出す。そして見ていられないほどに取り乱す。いつもなら状況は違えど鈴がこうなるパターンが多いのであるが、今回は全てが真逆だ。

「どっちだと思う?」

鈴はその問いに「ふふっ」と微笑みかけながら友一に返す。友一はぼけっとしたまま、「どっちでしょう」と考えるような素振りを見せる。イツキは上手い返しだなと、正直感心してしまった。

「――それで、友一は私に何の用があるのかな?」

この流れでいきなり本題に探りを入れる鈴。彼氏がいるかいにか分からないまま、友一は用件を言わざるを得なくなってしまった。イツキはハラハラしながらその返事を待つ。

「はい。単刀直入に申しますと、私は――」

イツキは手に汗を握りながら「来るぞッ!」と腹をくくり、ギュッと強く目を瞑る。

「――私はゆきしろ先輩にサッカーを教えて欲しいのです」

イツキは拍子抜けをしてしまった。

本当に体勢が崩れそうになったので、ひとりで踏ん張って持ちこたえる。

「サッカー……？ 私がサッカーを教えるの？」

「はい。そうです。この前のサッカーの授業で、ゆきしろ先輩の華麗な技の数々を陰ながら拝見しました。私はサッカー部に所属しているのですが、どうしても上手になりたいのです。どうか協力してもらえませんか？」

意外と切実な願いだった。イツキはとんでもない方向に勘違いしてしまっていたのだ。とりこし苦労で振り回されていたと思うと、一気に疲れが出てきたような気がした。

「いいよ」

鈴はひとつ返事で了承する。

「でも、私はただ自分ができるだけで、そんな人に教えられるような技量なんて無いよ？ それにサッカー部なら私より上手な人もたくさんいるし、そっちに教えてもらうほうが手っ取り早いんじゃないの？」

鈴にしては大正論だ。イツキもこれには何の突っ込みどころの余地が無い。鈴の真摯な質問に、友一はどこか答えづらそうな表情だが、さっと顔を上げてその訳を話し始める。

「私はもっと上手くならないと、サッカー部を辞めないといけなくなってしまうのです」

衝撃的な発言だった。上達しないと辞めないといけないなんて、まさかプロの世界じゃあるまいし。あまりにも厳しすぎるのではないか。

「……私は下手なのに、一年生なのに、スタメン（スターティングメンバー。先発選手のこと）で試合に出されるのです。私自身も自分が試合に出るたびに足を引っ張っているのはわかるほど、下手なのです。チームメイトたちも、私が下手なのにも関わらず試合に出

されているので、きっと疎ましく思っているでしょう……。そんな状況を見かねたのか、私の姉が『試合で活躍できないのだったらお荷物になるだけで無様だから、辞めなさい』と……」

友一はいつの間にかまた下を向いてしまっていた。悔しさで声も震えているような気もした。

「……『下手なんだったら迷惑になるから辞めろ』ってか……。キツイことを言うお姉さんだな……」

「いえ！ 決してそのようなことを言っているのではないのです！ 姉はきつと、私のことを思って、このようなことを言っているのです！ もともと陸上しかやっていなかった私を、『サッカーなら陸上の経験も生きる』と言ってねじ込んでくれたのも姉なのです！ 引っ込み思案の私を前へ前へ引っ張っていつてくれたのはいつも姉でした。私はこんな形でサッカー部を辞めたくありません！ 姉の期待に……。少しでも応えたいんです……。！」

最後はふり絞るような声で言葉を吐き出していた。友一の手は固く握られ、血色が変わってしまっていた。

「……事情は分かったよ、友一」

鈴が友一に近寄り、優しく話しかける。

「……！」

友一は泣きそうになっている顔を上げた。

「でもその前に、友一のお姉さんと話がしたい。お姉さんはいつも、どこにいろの？」

鈴の顔は真剣だった。

「生徒会室です」

「生徒会室？」

イツキと鈴の二人には実に縁のない場所だ。

「はい。私の姉は杉崎優香……。生徒会長です」

杉崎優香（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

生徒会役員達

——飛び交う指示にテキパキと動く生徒会員。

——飛び散る青春の汗と、弾ける笑顔。

学生生活をより良いものへと改善すべく毎日躍動するその姿は、
高校生の憧れの的——……？

「あ——」。めんどくさい」

副会長の源達也がパイプ椅子に上体を仰け反らしながら文句を垂れる。短くまとめられた髪がいつもより余計に増して天を指す。

「そんなコト言わないで、ちゃんとやって下さいヨー。ついでに私の分も片付けてくださいヨー」

「イヤに決まってるだろ」

リオは「相変わらずケチですネ」と言いながら本棚から部活申請用紙の整理を続ける。綺麗な金髪が日光に反射して煌いている。

「源、ヤル気がないんだったら別に降りてもらってもいいんだよオ？」

「いっやー、そいつはできねえな。せっかく高倍率の激戦を勝ち抜いて生徒会室にいられる権利を勝ち得たんだ。手離すわけにゃ行かないな」

中央奥の机でハンコを押す作業に追われていた女性徒が源達也に半脅して苦言を呈すが、飄々としている源は慣れた様子でこれを躲けてみせた。

「杉崎会長まじ怖いッス！ やばいッス！」

リオのふざけ気味な反応にジロリと視線を向ける会長。リオはその視線に気付き、すぐに「ってタツヤさんが言ってました」と言い逃れをした。とんだ流れ弾に「ふざけんなバカヤロウ！」と声を上

のクォーターの血が流れる高校2年生女子である。

「リオはアホだからな。諦める会長」

後ろのソファーに座りながら書類関係を整理している源達也が會長をなだめる。

「Vous ? tes les plus stupides du monde」

「は？ なんて？」

「なんでもないです」

リオはフランス語で源達也に牽制球を投げる。

「なんかイラッとするな。さっきのはどーいう意味だ？ リオ」

「『タツヤさんはとても賢いので勝てません』」

「絶対嘘だろ！」

ちなみに意味は「あなたは世界で最も馬鹿ですけどね」である。

リオは源達也の投げる紙くずをサッと避けてニヤニヤする。その態度に余計にイラッとする源であるが、こんなことは日常茶飯事なので杉崎優香も別に全く気に留めていたりはない。

紙くず攻撃から逃げ回るリオ。だがそれは突然開かれた扉によって無残にも押しつぶされることとなる。「へぶうつ！！」という、西欧系の美少女が決して出していけないような声を上げて壁に叩きつけられた。

「たのもー！！」

犯人は雪城鈴である。

「こら鈴！ いきなりノックもなしに扉を開けるな！ 失礼だし危ないだろ！」

「そっか、ごめん。でも幸い誰も被害には——」
扉が反動でもどってくる。

そして、ふらついているリオと目が合う。

「——あってないみたいだし」

「あってるヨ——ッ！！ 超あってるヨ——ッ！
？」

金髪に碧眼の、まさに絵に描いたような西欧の顔立ちの美少女が鈴を捲し立てる。

「ていうかさっき目合ったよネ!? 合ったよネ!?」

「……イツキ。この子怖いんだけど……」

鈴は困ったような顔。自分のせいだという意識はないようだ。

「あ、神村。なんだ、この子の使用人力?」

「違うわ。なんでそうなんるんだよ」

イツキとリオには面識がある。二人は学年が一緒なのでそれは言うまでもない。だが鈴はまだ転校してから少ししか経っていないのでリオのことを知らなかったようだ。ちなみにイツキが意味もなく付いてきたのは鈴が心配だったからである。

「騒々しいわね。何か用かしら? 雪城さん」

ソファアに座る源達也の右隣に立っていた杉崎優香が鶴の一声で本題に進めるべく帆を張り指針を立てる。

「杉崎優香さんはいますか?」

鈴の表情は真剣なものに変わる。

「私だけど」

鈴の目に何か感じたものがあつたのか、杉崎優香の眼光も生徒会長のあるべきそれに打って変わっていた。

「友一の件で話があります」

鈴の「友一」という発言に、優香は心のなかで「へえ」と思った。

「友一が何かした?」

「いえ、何かしたのはあなたの方ですよ」

鈴の語調が少しだけ強いような気がする。

イツキはその硬直気味な雰囲気緩和させようと、話に割って入ろうとしたが、鈴に右手で進路を阻まれて介入することは叶わなかった。

「……何か知らないけれど、話は放課後にしましょうか。場所は2年1組の教室でいいわね?」

2年1組は鈴とイツキのクラス。杉崎優香にとって生徒の把握は

お手の物だ。

「……なんだあ？　なんか面白そうなことになりそうだなあ？」

「タツヤさんは元から面白いナリで羨ましいですヨ」

「リオ、てめえ絶対俺のこと先輩だと思ってないだろ……」

シルビア・”リオ”・シェントウルク　高校2年生。

源達也　高校3年生。

彼とリオのこんなやり取りは本当に日常茶飯事である。

イツキはその様子を見て、「先輩も苦労してるんだなあ……」と
源達也に共同意識のようなものを感じた。

生徒会役員達（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0603x/>

だから彼女はついてくる！

2011年10月11日01時50分発行